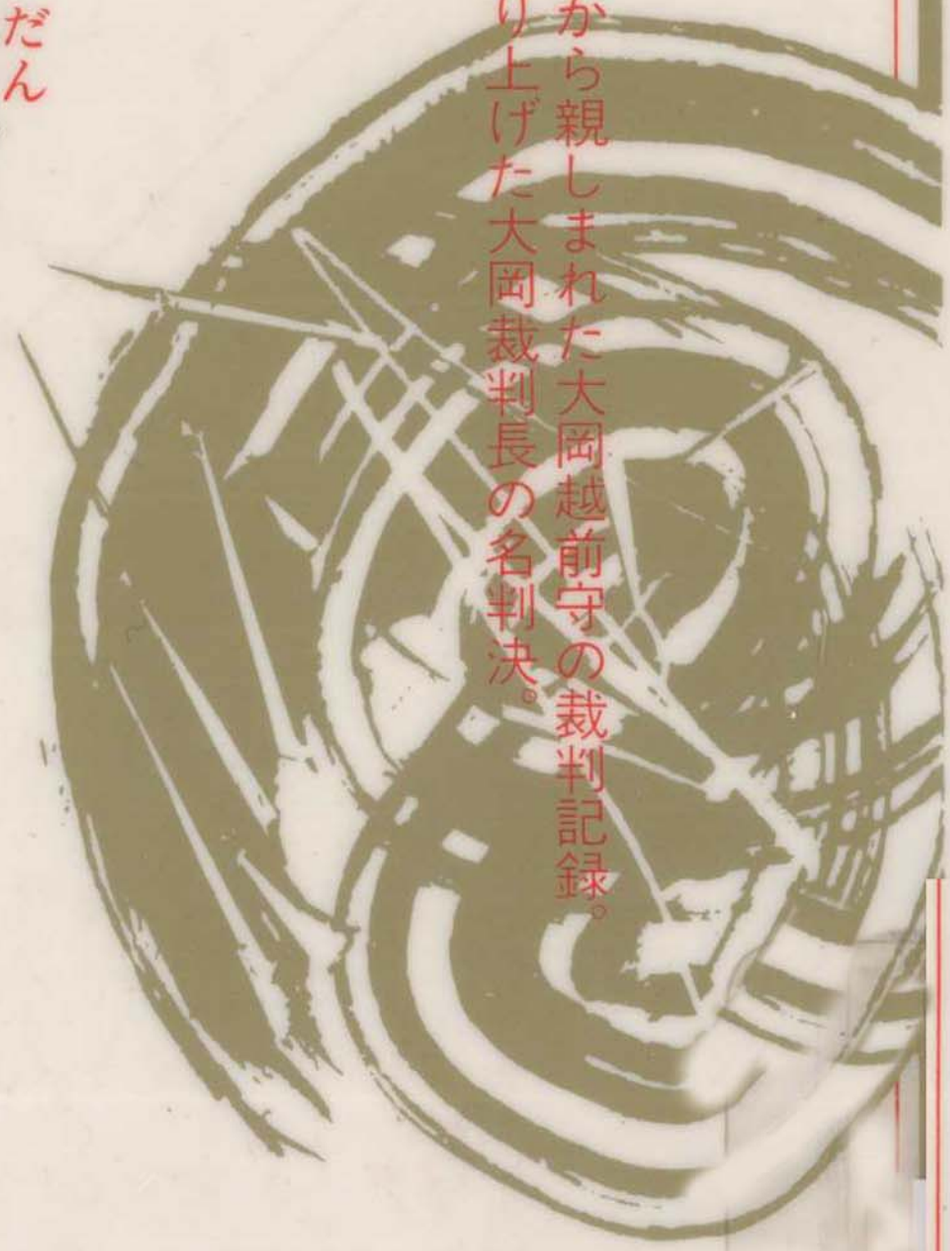
原本現代訳〈67〉

江戸中期、名奉行として民衆から親しまれた大岡越前守の裁判記録。
正義を願望する民衆社会が作り上げた大岡裁判長の名判決。

【教育社新書】

大岡政談

作者不詳
西野辰吉 訳



西野辰吉（にしの・たつきち）

一九一六年　北海道に生まれる
現　在　作家
一九五六年　『秩父困民党』で毎日出版文化賞
主要著書　『米系日人』（みすず書房）、『秩父困民党』（講談社）、『東方の人』（東風社）、『挑発者』（筑摩書房）、『戦後文学覚え書』『爆裂弾』『小説田中正造』『反乱と革命の陰画』（いずれも三一書房）、『首領』（ダイヤモンド社）、『石狩川紀行』（日本放送出版協会）など

教育社新書〈原本現代訳〉67

大岡政談

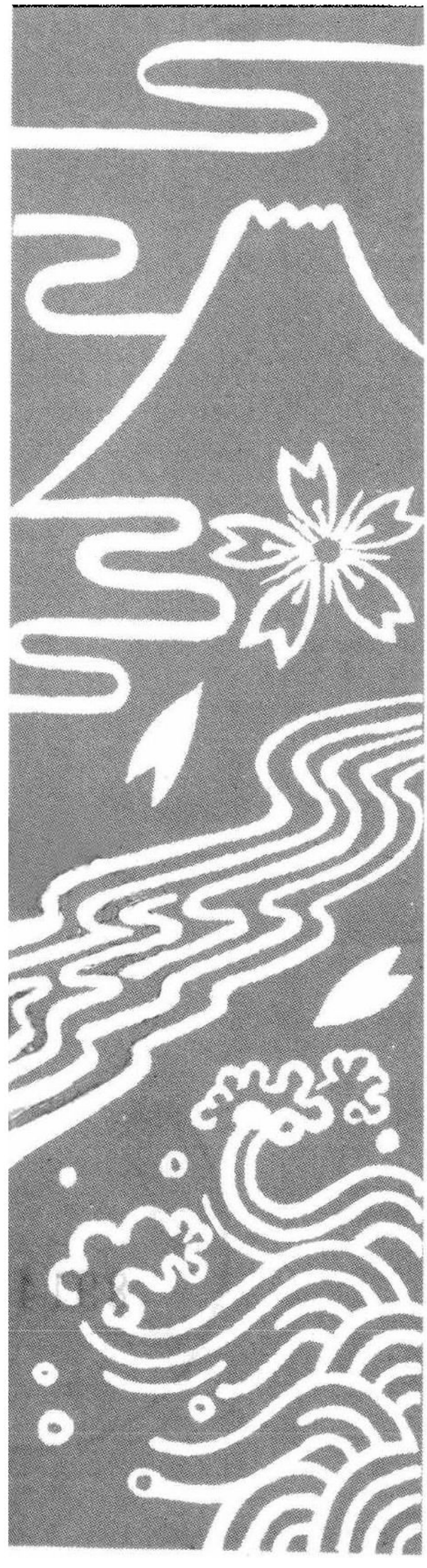
一九八九年九月三〇日　第一刷

訳者――西野辰吉
発行者――高森圭介
発行所　株式会社　教育社
販売＝教育社出版サービス株式会社
〒102　東京都千代田区富士見二―一―一〇　丸十ビル
電話〇三―二六四―五四七七(代)
印刷＝株式会社　日本制作センター
落丁本・乱丁本はお取り替えします。
※定価はカバーに表示します。

ISBN 4-315-51032-7 ©西野辰吉　1989

原本現代訳67

大岡政談



作者不詳　西野辰吉　訳

はじめに

江戸時代中期に江戸町奉行を二十年にわたってやった大岡越前守忠相（ただすけ）は、『大岡政談』で名裁判官として後代につたえられるようになったのだが、『大岡政談』は、しかし史実の事跡の記録ではない。ドキュメントではなくて、民衆社会に写本や講談、あるいは落語などの語りで親しまれていった、フィクションの物語である。

それで江戸文学史にもうかびあがらなかったりするが、赤穂浪士の『忠臣蔵』、水戸黄門ほどでないにしても、大岡越前守の名前は、二百年後の現代でも、忘却されてしまっているわけではない。解説で『大岡政談』の成り立ちや、まったくのフィクションではない史実との関係などについて書くので、解説を参照していただきたい。

『大岡政談』が当時のほかの史書、稗史（はいし）のなかで独特なのは、犯罪と裁判の物語だということである。時代が遷り、いまは江戸の封建社会とはまったくちがった状態でわたしたちは生きている。だが、犯罪ということでは、たいして変わっているわけではなくて、『大岡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

政談』を現代の文章に書きかえる仕事をしながら、わたしはこれらの物語が江戸中期に過ぎ去った過去完了の物語ではなくて、いまもべつなかたちで自分の身近でくりかえされているのだと考えさせられないではいられなかった。

『大岡政談』は、近代になって、有朋堂文庫、帝国文庫に収録されて刊行されていて、わたしは帝国文庫（博文館刊）の刊本を原書にした。

西野　辰吉

目　次

はじめに……3
天一坊一件……11
沢の井へのお墨付……12
宝沢失踪……17
九州路潜行……24
山賊赤川大膳……31
天一坊に変身……40
大坂に進出……48
大岡越前守の疑い……52

紀州捜索……57
再吟味の危機……64
審　判……68
白子屋お熊一件……73
加賀屋駿河屋のこと……74
井筒屋と金屋の約束……79
大岡越前守の審理……85
白子屋お熊と婿……91
策謀と失敗……95

直助権兵衛一件……103
権兵衛糾明される……104
村井長庵一件……109
贋医者……110
弟殺し……112
お安殺し……117
長庵騙りをかさねる……122
小夜衣と千太郎……131
牢死人の妻の訴え……134
大岡越前守の再審……139
裁き……142

煙草屋喜八一件……149
勘当された吉之助……150
喜八夫婦の困難……153
お梅誘惑される……158
再吟味……162
越後伝吉一件……169
山道の古びた宿……170
野尻宿での再会……174
猿島河原の惨劇……181
駕籠訴……185

大岡裁き……190
首なし死体の謎解ける……196
判　決……201
傾城瀬川一件……205
遊女になるまで……206
瀬川の仇討ち……210
大岡裁き……214
小間物屋彦兵衛一件……219
彦兵衛と女隠居……220
殺人事件……224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

権三と助十……226
少年彦三郎の旅……228
皮剝獄門……233
解説　大岡忠相とその時代……237
『大岡政談』の成り立ち……238
大岡忠相の昇進……240
史実との関係……244
享保の時代……247

天一坊一件

沢の井へのお墨付

第八代将軍吉宗は、徳川御三家の紀伊藩主光貞の三男で、徳太郎信房と名づけられた。生母は九条関白家から嫁いだ正室お高の方である。

大名家では奥方が江戸屋敷で暮らすのだったが、光貞が国元に帰って病んだことから、お高の方が和歌山へいって看病したいと将軍に願い出て、特に許されることになった。光貞の病が治り、そしてお高の方が妊娠し、和歌山で生まれたのが徳太郎であった。

お高の方は、じつはみごもったとき、ふしぎな夢をみたという。空の日輪と月を両手に握った夢であった。唐土の名僧玄装法師が、夢を現夢、虚夢、霊夢、心夢の四つにわけているが、お高の方がみたのは神霊仏菩薩のお告げである霊夢であった。

光貞もその夢を知って、もし男子なら優れた器量の人物になるだろうとよろこんだのだった。だが、江戸屋敷ではなく、国元に看病にきて妊娠したのだったから、将軍への遠慮があって、光貞が四十二歳の厄年だったことを理由にして、家老の加納将監に相談して、

将監の屋敷で育てさせることにした。おりから加納将監の妻も出産したが、その子が死亡したので、そこで将監の妻が乳母になって、徳太郎は家老の屋敷で養育された。

やがて少年になった徳太郎は、学問を学んだけれども、城ではなく行動自由な城下の屋敷にいたものだから、山野を駆けめぐって遊びまわり、領内の外の伊勢にまで出かけるようになった。

伊勢の阿漕ケ浦は、むかしから神領で、殺生禁断の禁漁区だった。徳太郎のひきいる遠征隊は、その阿漕ケ浦を犯すようになって、夜、網を打った。

そのとき、この浦を管轄していたのが伊勢山田奉行大岡忠相だった。それで密漁者を捕らえてみると、徳川家の葵の紋の高張提灯を掲げて密漁していたのは、紀伊藩主の子の徳太郎信房だった。

——提灯の葵の紋がみえないか！

と捕方をどなりつけるのだったが、大岡は徳太郎の密漁隊を捕らえて奉行所で裁いた。

——そのほうは紀伊藩主の子を騙る偽者だろう。まことの藩主の子なら、神領を犯すようなふるまいをするはずがない。

大岡忠相はじっさいに徳太郎だということがわかっていたのだが、そんなふうに諭して釈放した。徳太郎も反省して、それから傍若無人な行動を慎むようになった。

数年してそのうち、徳太郎は将監の屋敷の女中のひとり、沢の井を愛するようになって、沢の井が妊娠した。

徳太郎は藩主の三男だったが、家老に養われていて、まだ家禄をあたえられていない部屋住みの身分だったので、認知のお墨付に短刀を添えて沢の井に渡し、実家のある平沢村に帰して出産させることにした。

――そのほうが懐妊したのは、わたしの子にちがいない。男子出生ならば将来ひきとる。女子出生ならばそのほうで勝手にしていい。後日の証拠のために短刀を相添える。

この短刀というのは、家康公の持品で、光貞にあたえられ、さらに徳太郎信房がもらっていた、浅黄綾の葵の紋を染め抜いた袱紗に包まれた由緒ある名刀だった。

そのころ、紀州家の分家の伊予の松平家で、当主左京太夫が死亡したので、徳太郎に家督を継がせたらどうだろうということになって、話が決まった。それで沢の井を実家に帰して、徳太郎は江戸に向かった。

沢の井は妊娠五カ月になっていたが、加納将監の屋敷では沢の井が妊娠したことをだれも知らなかった。

さて、沢の井の実家というのは、和歌山の城下から六キロ隔てた平沢村で、母親がお三といい、産婆をやっていたので、お三婆といわれていた。この一家は信州から流浪してきたのだが、平沢村の名主甚兵衛がなかなか世話好きな男だったので、村にとどまり、そのうち父が病死して母子二人きりになったので、城下の口入屋榎本屋の世話で、沢の井は加納将監の屋敷に奉公にあがっていたのである。

お三婆は娘が信房の胤を宿したのを知って、よろこんだ。だが、だれにも知らせず、母子二人だけの秘密にした。

沢の井は宝永三年（一七〇六）三月十五日の子の刻（夜十二時）、男の子を産んだ。が、出生後まもなくこの子が死んだので、そのショックで産後の沢の井も生命が絶えた。

お三婆は二人を村の光照寺に葬ったが、いちじ気がおかしくなって、戯言をぶつぶつ口ずさみ、あちこちさまよいあるくようになった。それで平沢村の名主甚兵衛が気味わるくなって、住まわせていた隠居所からお三婆をたちのかせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com